

網段三本

12 抄

詩の鑑賞

野に暮らしての詩の鑑賞

女學生

17 抄

この詩の言葉は平明で流れるように

2、日常語ばかりであるが、詩言葉の上で何と

明かすかのほふりである。形も散文的

自由で何と拘束するところなく自由である

物語の通うの調子をわけてある。さうの歌

言葉とそれのつらさ呼吸のせいで、楊柳楊柳

とやうに詩としてこの句と、その自由な形をとって、言

葉のわのつらさやわさを通句やとして行として

のである。

「兒は日覺 けふ」と昔の句の、水と。聲を流

れ、乃はあり。庭へ生え」と詩高へ叫ぶ詩人の心は

庭で、昔のつらさの春の早朝の爽やかなる光と

空と、春のつらさの歡びを感じたのである。みん

起きてそのつらさのつらさ、聲を上げ。梅も蕾をふく

らと、霜も雪も去るやうな気がついて一陽來復といわ

れるやうな勢をわけるには、いかと歌うところの

である。

20-21